

## 「境談」と「日本人奴隸」のこと

——中世生活文化史・二題——

横 井 清

### (一) 「境談」小考

中世史（生活文化史）専攻の筆者は一門外漢に過ぎないが、いわゆる国語史の研究分野では古くから周知のものとなっている史料に、室町時代の公家、三条西実隆の日記『実隆公記』明応五年（一四九六）正月九日条がある（後掲<sup>(1)</sup>）。これについては別の場で臆面もなき小文を認めていたが、その後の知見若干を含めて再整理を試みた結果をここに記させていただく。彼此重複する点の多いのは内心忸怩たるものがあるが、予めご海容を請う次第である。取扱う問題は、室町時代における日本語の中での「方向」を指示する助詞に関する些細な問題であり、どちらに転んだとて大したことではあるまいと受け取られる向きもあろうが、筆者がかように一見些末な問題にも固執してしまいがちなのは、説話・御伽草子・歌謡・能狂言などを通じて感得される中世人の言葉遣い（用語、ものの言い方）一つも、中世文化に独自の範疇を探り当てて行こうとする上では、疎かにはできないものと考えからである。例えば、永正一五年（一五一八）成立の歌謡集『閑吟集<sup>(3)</sup>』にある、

柳の蔭にお待ちあれ 人間はばなう(のう) 楊枝木切ると仰しやれ

という逢引きの小歌の「仰しやれ」(おっしゃい)については、「仰せあれ」の約転であり、発音は「おしやれ」で「おっしゃれ」に同じ、と説かれるが、「お待ちあれ」(お待ちなさい)のほうも、当代の実際の会話での発音は「……ち・あ・れ」ではなくて、「お待ちやれ」だったと見るのが、能舞台での狂言方の科白のやり取りを直ちに思い浮かべる者には、自然で近しく感ぜられるのである。また、『奉教人の死』や『きりしとほろ上人伝』などの創作での芥川龍之介の文体・用語上の苦心、あるいは、ある新聞連載時代小説で読者の不平不満を余所にしながら、井伏鱒二が戦国期の武家の主従の蜿蜒たる会話の構成に腐心したという挿話<sup>(4)</sup>などを連想するだけでも、歴史学者としてはせめてもう少し、研究対象とする時代の人々の言葉遣いにも「神妙」であつてよいと反省させられる。日記・古記録・古文書の読み込みの深淺にも、目立たぬ形でそれは響くはずなのである。さて、問題の『実隆公記』の記事とは、左に掲げる通りである。

宗祇法師来、滋野井被勸一盞、ぞうたん雑談(中略)及晚彼法師引合ひきあわせ「引合紙」筆者注」三帖送之、美麗之紙也、秘蔵無極者也、(中略)

宗祇談

京ニ筑紫へ、坂東、

京ニハイツクニユクナト云、筑紫ニハ、イツクヘユクト云、坂東ニハイツクサユクト云、又坂東ニハヨト云所ニ、ロト云詞をツカフ、セロセヨ也、コロコロ也、如此境談アリ、何ノ子ロト嶺ヲ云モ所ノ境談歟、又等ノ字ノ心歟云々、

「宗祇談」以下を訳すと、

宗祇の談話。

京に筑紫へ坂東さ。京では「何処に行く」などと云う。筑紫では「何処へ行く」と云う。坂東では「何処さ行く」と云う。また、坂東では「よ」と云うところに「ろ」と云う言葉<sup>言葉</sup>を充てる。「せろ」（せよ、である）、「ころ」（来よ、である）。このように「境談」がある。「何のネロ」と嶺<sup>ね</sup>のことを云うのも、その土地の「境談」か。また（ロと云うのは）「等<sup>ら</sup>」と云う字と同義か。

ということになる。

文中にみえる「境談」の語は、収録語彙の多い専門的な漢和・国語辞典のいずれにも出ていない。但、国語辞典には「郷談」（きょうだん・きやうだん）の語はあり、その語義から、実隆の記した「境」は「郷」の当て字とみられる。「郷談」は、今、『時代別国語辞典 室町時代編 二』（三省堂刊）によると、その地方の人々の間に行なわれる、特有のものの言い方、言語を指し、室町時代、一五世紀後半に成立の国語辞書『文明本節用集』に既にみえる熟語というから（小学館『日本国語大辞典 三』の「きやうだん 郷談」項）。無論のこと実隆の耳にもなじんでいたはずの語であるが、要するに「方言」であった。

ちなみに、「その国、地方に特有のことば。方言」を指す語としては「国郷談」（くにきやうだん）という語も、同時代に流布していたことが知れる（前掲『時代別 国語辞典』『国郷談』項）。ここに言う「国」は、旧地方行政単位としてのそれである。

ところで、先の記事中の

京<sup>ニハ</sup>イツクニユク<sup>ナト云</sup>、筑紫<sup>ニハ</sup>、イツクヘユクト云、坂東<sup>ニハ</sup>イツクサユクト云

の部分は、著名な諺ともなつて人口に膾炙していたらしい。方向を示す助詞として京都・九州・関東の場合の違いを端的に表現したものである。しかし、その諺は実は二種あり、一種は「京に、筑紫へ、坂東さ」であり、もう一種は「京へ、筑紫に、坂東さ」なのである。通常、諸辞典では、この諺は、後者の「京へ、筑紫に……」が代表格として扱われ、「京」（京都）の項目に付随する形で掲出・解説されるものである。

ちなみに筑紫・坂東の場合のことは兎も角として、かんじんの京言葉（近世、京談<sup>きやうだん</sup>といった）では、「方向を示す助詞」として常用され続けてきたのは圧倒的に「に」である。むろん「へ」も多用されるが、京都弁での気安い日常会話だと、自然に口にし、耳にもされてきているのは「に」であつて、それとなく相手の口調に耳を澄ましていれば、容易に確認できることなのである。

話を本題に戻すと、要するに諺としては「京へ筑紫に坂東さ」が人口に膾炙しきつたために、「京に……」の方は二次的に扱われやすくなり、いわば「裏方」に回ってしまったわけである。酒席の「雑談<sup>ぞうたん</sup>」の一駒であつたとはいえ、言葉には格別敏感なはずの練達の老連歌師、飯尾宗祇（当年七六歳）が「京」の人、実隆の耳に直に伝えたのが、いわば「京に……」なのであり、実隆も、それを素直に聴き取って手づから当日の日記に記し留めたはずなのだが、「京へ……」が圧倒的に優勢となつたために、あるいは宗祇が告げ違えていたものか、はたまた実隆が聞き（記し）損じていたものか——との疑念が、後世に永く残ることとなつた。

この点については、前掲『時代別国語大辞典 室町時代編 二』の「京 きやう」の項が「京へ、筑紫に、坂東さ」を挙げて、次のように説く。

「筑紫に京へ坂東さ」とも。(中略)【参考】実隆公記(明応五、正、九)に宗祇の談として「京ニ筑紫へ坂東サ」とある。これをいかに解すべきか問題であるが、この形はすでに遍口抄(元亨四年本)などにも見えており、日記に書きとめた際の誤りとも言い切れない。

元亨四年(一二三四)の書物にみえるというのであるから、鎌倉末期には既に「京に……」の方は成立していたのであるが、『時代別国語大辞典 室町時代編』の編集委員でいられる大塚光信氏(国語学)よりご教示を受けたことも含めて、この二種の諺に言及する諸典拠を成立年代順にし、且つ、「京へ」と「京ニ」の区別を併記すれば、別表の通りである。

また、前掲の辞書の解説文中では「京ニ」の表現が「遍口抄(元亨四年本)などにも見えており」云々とあって眼を惹いたが、「京ニ」ではなく「京エ」とするのが延徳元年(一四八九)前後の成立と目されている②『蕉窓夜話』であるのを見ると、それまでの、鎌倉—南北朝—室町中期の辺りでは「京ニ」が主流を占めていたのが↓やがて互角となり↓室町末期—江戸初頭の辺りで「京へ」が主流を占めるようになった——という図式が浮かんでくるのである。

だが、その図式の中で、明応五年(一四九六)の③の『実隆公記』が「京ニ」とするのは、やはり気になる。趨勢としては「京ニ」から「京へ」の方へと向かうらしい、その流れの中での所出例であり、前掲の解説文が、①(など)との関連から「これをいかに解すべきか問題である」とし、「(実隆が)日記に書きとめた際の誤りとも言い切れない」と注意を促しているのは重要である。

「いかに解すべきか」という点では、筆者は以上の諸例を教わった後でもなお、連歌師の飯尾宗祇は聞き知って

発した。船内にはイエズス会宣教師アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノ神父（巡察使）と、彼の引率する数名の日

①『遍口鈔』	元亨4年（1324）本	「京ニ」
②『蕉窓夜話』	延徳1年（1489）前後成立	「京エ（へ）」
③『実隆公記』	明応5年（1496）1月9日条	「京ニ」
④『四河入海』	天文3年（1534）成立	「京へ」
⑤『蠡測集』	天文19年（1550）以降成立	「京へ」
⑥『ロドリゲス日本大文典』	慶長9～13年（1604～18）成立	「京へ」

いたとおりを語り告げたのであり、実隆もまた、それを誤ることなく聴き取り、記し遺したものと考える。

第一、双方の「雑談」の中でのこととはいえない条、実隆自身が、そのような、「に」「へ」「さ」などという「境談」（方言）の実際例を初に聞かされて強く関心を惹かれたからこそ、わざわざ記し留めたのであって、しかも「京」の人である彼が、他の「筑紫へ」「坂東サ」との対比において「京ニ」を聞き誤り書き誤ることなど、想像だし難いのである。その当時の明応年間にも京都では、間違いなく「京ニ」の語は一般的に用いられていたものと筆者は考えたいが、国語学界の現段階ではなお慎重に、今後の研究に俟つべき一課題として残されているのである。

先述のように、およそ、単に方向を示す「助詞」一つの使われように拘泥することに左程の意義はないとも見えようが、筆者にとっては同時代の京都における言語生活・言語文化の有り体への関心に連結しており、生活文化史の構想のためには、かように微細な問題点すらも、念頭から去らせずにおきたい。

## （二） 天正遣欧少年使節と日本人奴隷のこと

天正一〇年（一五八二）二月二〇日、イグナシオ・デ・リマ船長の指揮する八〇〇トン前後のポルトガル商船（ナウ船、定航船）が中国マカオ（澳門）へ向けて長崎を

本人青少年の姿があつた。キリシタンの三大名がローマへ派遣した、いわゆる天正遣欧少年使節と随行者の一行である。使節（正使）は伊東マンショと千々石ミゲル、これの同伴者（副使）が原マルチノと中浦ジュリアンで、いずれもが一二歳―一四歳であり、伊東マンショは大友宗麟の使節、千々石ミゲルは有馬晴信・大村純忠の使節であつた。彼らに付き添つた日本人キリシタンは、修道士イルマン・ジョルジュ・デ・ロヨラ（肥前諫早生れ、二〇歳前後）及び、随員コンスタンチノ・ドラード（これも諫早生れ）とアグスチーノ（肥前大村生れ）である。

二〇日間のマカオへの航海に始まり、マカオからマラッカへ、インド洋を越えてゴアへ、さらに南下して喜望峰を迂回、イベリア半島ポルトガルのリスボン（リスボア）に上陸して初にヨーロッパ大陸に足跡を印し、スペインのトレド、マドリードへ、そしてアリカンテ港から地中海に出てイタリア半島リヴォルノ港へ、そこからピサ、フィレンツェをへてローマに到達、大任を果たして再びリスボン―ゴア―マカオを経て、天正一八年（一五九〇）七月二〇日過ぎに漸く長崎に帰着という、当時の日本人の想像を絶する使節たちの長旅と旅中の見聞体験や彼地の人々の対応、歓迎ぶりについては、彼らの出自に関する比類のない考証をも含めて松田毅一氏の『天正遣欧使節』<sup>(5)</sup>が精細を極めるが、同書中、氏は、例えば次のような所感をも記して天正遣欧使節の胸中に思いを馳せ、一読者に深い感銘を与えられたのである。

こうしてヨーロッパ・キリスト教世界の奥深く旅を続ける伊東マンショたち日本の青年は、果たしてヴァリニャーノの指令通りに、「いっさい醜惡なもの」を見聞きしないですんだであらうか。他人との会話はすべてメスキータ師を介さねばならなかったし、彼らは西欧の言語に通じていかなかったから、彼らの耳に醜聞が入ることを防止できたであらう。だが眼に対してはそうはいくまい。彼らは馬車馬のように眼隠しをされて旅し

たわけではない。(中略) ヨーロッパ・キリスト教世界が完全な理想郷であることを描き報じようとする使節の記録には、いっさいそういう記事は出てこない。だがそれは彼らが醜悪なものを全然見なかったという証拠にはならず、ただ省略されているか、事実を歪曲し糊塗しているだけのことである。それだけにそれらの記録は非人間的であり、従って少なくとも私には、甚だ無味乾燥である。

「使節の記録」として筆者が折に触れてひもといてきていたのは、デ・サンデ編述『天正遣欧使節記』<sup>(6)</sup>、ルイス・フロイス原著『九州三侯使節行記』(正統)<sup>(7)</sup>、それに濱田青陵著『天正遣欧使節記』<sup>(8)</sup>であるが、そのいずれから受ける「少年使節たち」の印象は、異文化世界の真っ只中で、健やかに旅を続ける時も、病める身を修道院の寢床に横たえる時も、己に課せられた重大な任務を凜然として背負い続けたけなげさであった。松田氏も「使節の記録」には彼らの「笑顔」の印象の余りにも稀薄なことを特筆されていたが、筆者とて全く同感である。ただ、往路インドからリスボンへの船上のこととして、使節らの世話役のポルトガル人宣教師ディオゴ・メスキータが認めた書簡<sup>(9)</sup>に左のような箇所があるのには、微笑を禁じ得ない。セミナリオでイエズス会士らの薫陶を得たとはいえ、一皮剥けば、腕白盛りの少年たちだったのである。

広い甲板<sup>フランダ</sup>上で互に語り合ひ、楽を奏して悦び、エンシャドレス [enxadres、将棋に似た遊技] 訳注」を以て娛しむことと船が進行してゐるとき鮎・鯉・鯛を釣ることとは彼等の心に適ふた慰安であつた。或る朝爽快なる風を得て帆走してゐた間に、彼等が予て用意した糸で一時間ならぬに交みに<sup>(マ)</sup>大きな鯉十二尾を獲た。其の各一尾の重さは十五人乃至二十人分に相当したから、遂に釣針を毀つてしまった。又魚のみならずして、釣針



と糸とで鳥をも捕へた。(中略)

我等は島「喜望峰通過後に停泊したサンタ・エレナ島」筆者注に十一日間停留し、水と魚とを補給した。

(中略) 日本の公子等は娯楽として甲板上より釣魚をなしたが、漁獲が甚だ多く、ときには甲板が魚市のやうに見えたこともある。夜は甲板から網を下したが鍾のために海底に達して、多数の蝦や魚を捕へたから、夫れを貧困者に分与したばかりでなく、残余はリスボアへさへ届いたことであつた。蓋し公子等が自己の手で漁つたので夫れを大いに珍重したわけでもある。彼等は漁りに対して非常なる趣味を有つていたから、食事の時間のみでは獲物の魚が余りに多くて夫れを食するに苦しんだ。従つて彼等は「漁りに専心して」ほとんど甲板上にのみ坐してゐたのである。「之に反し」船夫等は釣魚に頗る下手であつた。

さて、松田氏が指摘されていた「果たして……『いっさい醜惡なもの』を見聞きしないですんだであらうか」との疑問に関連しては、やはり「奴隸」の問題、取り分けては「日本人奴隸」の問題について注目しておかねばならない。

中世末期の日本でも人身の誘拐と売買は盛んであつたが、いわゆる「南蛮船」の定期的な往来という新事態に触発されつつ、日本人奴隸は海外各地に広がっていた。岩生成一氏の記述<sup>(10)</sup>に、

一五七九年の初め頃、マラッカからイエズス会のベルナルディノ・フェラロ Bernardino Ferraro が報ずるところによれば、かつてポルトガル人の奴隸であつたが、六ヶ月前に信仰に入つて洗礼を受け、アントニオという教名を授けられた一日本人がポルトガル船に備われてジャワ島に渡り、船長等の罪を引きかぶり、スン

ダ国王の面前に曳かれて処刑されたが、その際彼の他にも日本人がいたということである。

と見えているのは、史料的に確認し得る限りでの一例である。そして後には、ポルトガル商人による日本人の買得と海外への売却の激化が、秀吉(関白殿)の「禁教令」発令にも根拠を与えて行く。

遣欧少年使節たちも、確かに在外日本人奴隷の存在を見知っていた。ヴァリニャーノの編述というプリズムを通して形作られた物であり、少年使節たち自身の「思考」と「表現」をどの程度にまで反映したものかは見定めにくいのであるが、『天正遣欧使節記』(注6所掲)の「対話十四 ヨーロッパにおいてふつうに行なわれる海戦の有様について」の中には、この問題についての「対話」が見えている。いささか長文になるが、敢えて左に引く。(傍点及び「」( ) 内は筆者)

ミゲル(千々石) ……日本人には慾心と金銭への執着がはなはだしく、そのためたがいに身売るようなことをして、日本の名にきわめて醜い汚れをかぶせているのを、ポルトガル人やヨーロッパ人はみな、不思議に思っているのである。そのうえ、われわれとしてもこのたびの旅行の先々で、売られて奴隷の境涯に落ちた日本人を親しく見たときには、道義をいっさい忘れて、血と言語とを同じうする同国人をさながら家畜か駄獣かのように、こんな安い値で手放すわが民族への義憤の激しい怒りに燃え立たざるを得なかった。

マンシヨ(伊東) ミゲルよ、わが民族についてその慨きをなさるのはしごく当然だ。かの人たちはほかのことでは文明と人道とをなかなか重んずるのだが、どうもこのことにかけては人道なり、高尚な教養なりを一向に顧みないようだ。そしてほとんど世界中におのれの慾心の深さを宣伝しているようなものだ。

マルチノ(原) まったくだ。實際わが民族中のあれほど多数の男女やら、童男・童女が、世界中の、あれほどさまざまな地域へあんな安い値で攫<sup>さら</sup>って行かれて売り捌かれ、はじめな賤役に身を屈しているのを見て、憐憫の情を催さない者があるうか。単にポルトガル人へ売られるだけではない。それだけならまだしも我慢ができる。というのはポルトガルの国民は奴隷に対して慈悲深くもあり親切でもあって、彼らにキリスト教の教条を教え込んでもくれるからだ。しかし日本人が賈<sup>あ</sup>の宗教を奉ずる劣等な諸民族がいる諸方の国に散らばって行って、そこで野蛮な、色の黒い人間の間に悲惨な奴隷の境涯を忍ぶのはもとより、虚偽の迷妄をも吹き込まれるのを誰が平気で忍び得ようか。レオ(帰国した使節を迎えたクリシタン) いかにも仰せのとおりだ。実際、日本では日本人を売るといふの(ママ)ような習慣をわれわれは常に悖<sup>はいとく</sup>徳的な行為として非難していたのだが、しかし人によつてはこの罪の責任を全部、ポルトガル人や会のパドレ方「イエズス会宣教師」へ負わせ、これらの人々のうち、ポルトガル人は日本人を慾張<sup>も</sup>って買うのだし、他方、パドレたちはこうした買入れを自己の権威でやめさせようとしないのであるといっている。ミゲル いや、この点でポルトガル人にはいささかの罪もない。何といっても商人のことだから、たとえ利益を見込んで日本人を買い取り、その後、インドやその他の土地で彼らを売って金儲けをするからとて、彼らを責めるのは当たらない。とすれば、罪はすべて日本人にあるわけで、当り前なら大切にしていづくしんでやらなければならぬい実の子を、わずかばかりの代価と引き替えに、母の懷から引き離されて行くのを、あれほどこともなげに見ていられる人が悪い。また会のパドレ方についてだが、あの方々がこういう売買に対して本心からどれほど反対しているかをあなた方にも知っていただくためには、この方々が百方苦心して、ポルトガル王から勅状をいただかれ運びになったが、それによれば日本に渡来する商人が日本人を奴隷として買うことを厳罰をもって禁じてあることを知ってもらいたい。しかしこのお布令ばかり嚴重だからとて何になろう。日本人はいたって強慾であつて兄弟、

縁者、朋友、あるいはまたその他の者たちをも暴力や詭計を用いてかどわかし、こっそりと人目を忍んでポルトガル人の船へ連れ込み、ポルトガル人を哀願なり、値段の安いことで奴隷の買入れに誘うのだ。ポルトガル人はこれをもつけの幸いな口実として、法律を破る罪を知らながら、自分たちには一種の暴力が日本人の執拗な嘆願によって加えられたのだと主張して、自分の犯した罪を隠すのである。だがポルトガル人は日本人を悪くは扱っていない。というのは、これらの売られた者たちはキリスト教の教義を教えられるばかりか、ポルトガルではさながら自由人のような待遇を受けてねんごろしごくに扱われ、そして数年もすれば自由の身となって解放されるからである。さればといって、日本人がこういう賤役に陥るきつかけをみずからつくることによって蒙る汚点は、拭われるものではない。したがってこの罪の犯人は誰かれの容赦なく、日本において嚴重に罰せられてよいわけだ。

レオ 全日本の覇者なる関白殿 Quambacudono が裁可された法律がほかにいろいろある中に、日本人を売るところを禁ずる法律は決してつまらぬものではない。

ミゲル そうだ。その法律はもしその遵守に当る下役人がその励行に眼を閉じたり、売手を無刑のまま放免したりしなかったら、しごく結構なものだが。だから必要なことは、一方では役人自身が法律を峻厳に励行するように心掛け、他方では権家なり、また船が入って来る港々の長なりがそれを監視し、きわめて嚴重な刑を課して違反者を取り締ることだ。

レオ それが日本にとって特に有益で必要なこととして、あなたの方から権家や領主方にお勧めになるとよい。

ミゲル われわれとしては勧めもし論しもすることに心掛けねばなるまい。しかし私は心配するのだが、わが国では公益を重んずることよりも、私利を望む心の方が強いのではなからうか。実際ヨーロッパ人には常にこの殊勝な心掛けがあるものだから、こうした悪習が自国内に入ることを断じて許さない。(下略)

筆者の関心の在りかは傍点によって示してみたのであるが、前掲岩生氏の文にあった「アントニオという教名を授けられた日本人」、「彼の他にも日本人がいた」云々のことを思い合わせても、使節たちの目に「日本人奴隷」たちが触れていたのに間違いはない。しかし、その後に出る表現では、使節たちがそれに憤り、その義憤は「わが民族」の中の不埒なる同胞へと向いていたということ、並びに、慈悲深く親切なポルトガル人に賣渡するならばともかくとしても非キリスト教徒の「劣等な諸民族」がいる諸国に賣渡され、しかも「野蛮な、色の黒い人間」の間で駆使され翻弄される悲惨さは見るに忍びない——と述べられていること、更には、ポルトガル人にはいっさい罪はなく、強欲なる日本人が罪のすべてを負うべし——と断じていること、等が印象的である。

本書の成立の仕方については注記（注6参照）したが、何もこのとおりの「対話」が実在したわけではないどころか、いっさいがイエズス会の価値基準で取り仕切られていたと観るのが真実に近く、従って、この記述から使節たちの感想・判断を聞き分けることは至難という他はない。

だが、訳者が、

往復の途上およびヨーロッパの各地において作成せられた公私の記録も多く、それらの、少なくとも主要なもの、使節と共に送られて、当時、日本を含む東インド（つまり東洋全区を含む地域の）宗務管区の責任者としてゴアに駐在中であつた巡察使ヴァリニャーノの手もとに集められたにちがいない。<sup>(11)</sup>

と推察しているのに頼れば、使節たちが各地で日本人奴隷を見ていたという事実を感じ取らせる部分以外の記述の内にも、使節たちが実際に旅中に口から漏らしていた「言葉」の片鱗は潜んでいるに相違あるまい。編制された

「対話」を、その成立事情によって軽視するのではなく、これすらをも手掛かりとしながら、使節たちにとっての真実を少しでも着実に探り当てて行こうとする作業が続けられてよい。あの少年たちは、イエズス会士たちから、いったい何々を教わり学び取ったのであろうか。また、一六世紀末期の日本人の「生活文化」史にとって、キリスト教の伝来とはいったい何であったのか。<sup>(12)</sup> その作業は、キリスト教徒の「劣等な諸民族」云々、「野蛮な、色の黒い人間」云々の問題も含めて、筆者にとってはいわゆる「ヒューマニズム」についての諸先学の考えを学び直すことから始まらねばならない。その再出発点は、近年横溢する大航海時代関係書の山を潜り抜けて、所詮は一九七〇年代半ばに一読、衝撃を蒙ったL・ハンケ著『アリストテレスとアメリカ・インディアン』<sup>(13)</sup>へと試みに立ち返ってみることにある。ヨーロッパ大陸に初に足跡を印するまで、時に「漁りに専心して」ほとんど甲板にのみ坐してゐた（前出）という少年たちの後ろ姿と、彼地の松舞台で公的に明示された彼らのけなげさとを大事にしながらかえ続けたいと思う。

【注】

- (1) 続群書類従刊行会刊『実隆公記』による。読みがな＝筆者。
- (2) 「言の葉、卯の花」（三省堂宣伝部発行『ぶつくれっと』九八号、一九九二年五月、所載。補訂の上、『花橋をうゑてこそ—京・隠喻息づく都』一九九三年一〇月、三省堂刊に収録）。
- (3) 新聞進一・志田延義編『歌謡II』（『鑑賞日本古典文学』第一五巻、一九七七年、角川書店）による。ここに引用した小歌については、同書二〇三頁参照。
- (4) 寿岳章子『埒外の文体——中世の文体の位置——』（『国語と国文学』五一巻四号、一九七四年四月）参照。
- (5) 松田毅一『天正遣欧使節』（一九七七年、講談社。一九九〇年新版、同社）。以下の引用は新版一五七～八頁より。

- (6) 『デ・サンデ 天正遣欧使節記』（『新異国叢書 五』、泉井久之助、長沢信寿・三谷昇二・角南一郎訳、一九六九年、雄松堂）。後年にゴアにいたヴァリニャーノが公私の諸記録をもととして、帰国後の使節たちが故郷の人々の問い掛けに答えるという想定で「対話」形式により編述し（スペイン語で作稿したといわれる）、それをイエズス会士でラテン語に特に秀でたデ・サンデがラテン語に翻訳したという。（同書巻末解説参照）。
- (7) ルイス・フロイス『九州三侯遣欧使節行記』（岡本良知訳註、正篇一九四三年再版、東洋堂、続篇一九四九年、同社）。
- (8) 濱田青陵『天正遣欧使節記』（一九三一年、岩波書店）。
- (9) 注6所掲『九州三侯遣欧使節行記』正篇第二章四五～四九頁に引かれている。
- (10) 岩生成一『続 南洋日本町の研究―南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動―』（一九八七年、岩波書店）二頁より。
- (11) 『デ・サンデ 天正遣欧使節記』解説、七―四頁より。
- (12) ドミニコ会士ディエゴ・コリヤード『懺悔録』（大塚光信校注、岩波文庫）により、日本キリシタンの「迷信」とキリスト教との関係を少しばかり考えてみたことはある（「鳥の声、弓弦の音」、「『的と胞衣』一九八八年、平凡社、所収」）。
- (13) L・ハンケ著『アリストテレスとアメリカ・インディアン』（一九七四年、岩波新書）。